

近代社会の疎外された人間像

——ケラーの「マルティン・ザランダー」の一考察——

中野和朗

(一)

バルザック (1799~1850)、ヴィクトル・ユーゴー (1802~1885)、トルストイ (1828~1910) など同時代の作家であるゴットフリート・ケラー (1819~1890) は、時代の子としてそれらの作家たちに決して劣らぬすぐれたリアリズム文学の遺産をのこしている。高い思想性に裏うちされた洞察力とヒューマンイズムの熱い心をもって、鋭く現実を観察し、それを小説として結実させれば、そこには自ずから現実批判と社会的不義不正の告発が現われずにはいない。

ケラーのリアリズム文学のイデオロギーを成りたたせているのは、本質的にはフォイエールバッハの哲学とスイス固有のデモクラシーである。それを武器として現実批判を行なったが、それはケラー独特のフォームに包まれていて、そこからケラー文学の好ましい特性が醸し出されている。その特徴がもっともよく現われているのは、短篇集、「ゼルトヴィラの人びと」(1, 2巻)であることに異論の余地はない。

「ゼルトヴィラの人びと」の背景は、資本主義勃興期のスイスであり、夫々の短篇に登場する主人公をはじめとする人びとは、すべてその時代の子として特徴づけられている。

資本主義勃興期の時代というのは、すでに社会全体が商業社会と化し、その成員をすべて商人化してしまう社会である。

私的所有、分業、商品生産と流通などを体制とする社会では、本来自己実現活動であるべき労働は疎外される。疎外された労働は、「人間の類の本質を、すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも、彼にとって疎遠な本質とし、彼の個人的生存の手段としてしまう。疎外された労働は、要するに彼の人間の本質を疎外する。」⁽¹⁾

資本主義社会が発展するにつれて、このような疎外状況はますます進行し、個々の人間関係の中に容赦なく浸透する。したがってその中に投げこまれ、その中でしか生きることを余儀なくされる存在にとっては、そのような疎外状況そのものが本来あるべき正常なものと思われるようになる。

疎外状況の中に埋没した疎外された人間にとって、疎外状況を自ずから認識することはきわめて難かしい。しかし、真実を見抜く正しい世界観を身につけているリアリズムの作家、例えばケラーのような作家は、普通の人間の目には、とくに変哲もないものと思われる日常茶飯の人間関係の中からこの疎外された人間の姿を浮き彫りにし、それによって、その異様さを明らかにする。

「ゼルトヴィラの人びと」の中で、ケラーは、夫々の短篇の中でそれぞれに疎外されたさ

さまざまな人間像を實に見事に活写し、ドイツ語で書かれた稀有の、したがってそれだけ貴重なリアリズム文学を創り出した。「ゼルトヴィラの人びと」第1巻は1856年に出版されたが、その後ケラーは現実にチューリヒ州の第一書記に選出(1861~1876)され、政治的活動に献身する。彼はこの体験を経て、1886年、「マルティン・ザランダー」(Martin Salander)をおよそ5年をかけて書きあげた。

ケラーの最後の作品となったこの長篇小説は、「ゼルトヴィラの人びと」のあの勝れたリアリズム性がさらに先鋭化されている。そこには当時の、つまり新憲法が制定された1869年前後のチューリヒ州の社会状況とザランダー家をめぐる人間模様が描かれているが、この作家は其中で疎外状況と疎外された人間の諸相を徹底的に暴露し告発している。

本稿では「マルティン・ザランダー」に現われた疎外された人間の諸相について考察したい。

(二)

小説の題名「マルティン・ザランダー」は、主人公の名前である。

この長篇小説は、マルティン(Martin)を家長とし、その妻マリー(Marie)、2人の娘ゼッティ(Setti)とネッティ(Netti)それに息子アルノルト(Arnold)という家族から成るザランダー家をめぐる物語であり、いわば「ザランダー家の人びと」といってよい。しかし「ブッデンプロック家の人びと」と較べるとすくなくとも時間と空間の点では非常にコンパクトである。すでに述べた通り舞台はチューリヒと推定されるスイスの街ミュンスターブルクとその周辺が中心であり、時代背景は1850年代から1880年代にかけてのせいぜい30年位のものに過ぎない。

「マルティン・ザランダー」は、このようにザランダー家をめぐるおよそ30年間のさまざまな出来事と人間模様が21章に分けて物語られているロマンなのである。あらかじめ各章毎にあらすじをごくかいつまんで紹介すると次のとおりである。

物語りは、友人ヴォールヴェント(Wohlwend)の保証人となったがために破産したマルティンが、再起を期して出稼ぎに行っていたブラジルから7年ぶりに妻と3人の子供たちが待つミュンスターブルクへ戻って来た情景から始まる。これが第1章である。

第2章では7年前のいまましい不幸な出来事の経緯が語られる。その不幸をもたらした張本人、学校友達のルイス・ヴォールヴェント(Louis Wohlwend)の行状や性格の特異性について述べられている。

第3章は夫の帰宅を待つ妻マリーと3人の子供たちの困窮した生活状態とマリーの人柄などが語られる。そして明日はどうなるか判らぬ絶望的な状況の真只中に夫であり父であるマルティンの予告なしの帰宅と家族再会のよろこびについて書かれている。

第4章では、マルティンがブラジルで蓄財した15万スイスフランを振込んだシャーデンミュラー商会(Xaverius Schadenmüller & Comp.)が、前日破産したことが、シャーデンミュラー商会の店主があつたヴォールヴェントであることが判明。

第5章は、マルティンが、またもヴォールヴェントの絡んだその不幸な出来事をマリーに伝える。それを聞いて憤慨するマリー。マルティンは「そんなに悲しまないでくれ。たかが

お金のことに過ぎないではないか。お金が唯一最高のものではない」⁽²⁾と慰さめる。決着を訴訟にゆだね、マルティンは再度ブラジルに戻り再起をはかる。別離の前の家族揃っての森へのハイキング。

第6章。3年後、ブラジルで事業に成功したマルティンの帰国。家族揃っての生活の再開。ヴォールヴェントのその後の消息。

第7章。マルティンはミュンスターブルクで事業再開。新憲法制定と社会の様子。マルティンの政治的活動への傾斜。

2人の娘の恋愛。相手はヴァイデリヒ (Weidelich) 家の双子の兄弟イシドール (Isidor) とユリアン (Julian) である。

第8章。ゼッティとネッティは、それぞれイシドールとユリアンとの結婚を希望する。両親は反対である。恋人達は文通で交際を継続する。

第9章。マルティンは州議会議員に推挙されるが辞退する。イシドールとユリアンの政治活動への参加。

第10章。イシドールとユリアン兄弟のはなばなしい社会的活動の様様。二人とも公証人 (Notariat) に選出される。幸運にめぐまれた二人は、夫々ウンターラウプ地区とリンデンベルク地区から州議会議員に選出される。当時のスイスの政治的・社会状況の描写。ゼッティとネッティはヴァイデリヒ家で好意を寄せられる。

第11章。ゼッティとイシドール。ネッティとユリアン。二組の華やかな結婚式が催される。息子コンラートの進路について。

第12章。マルティン再度州議会議員に推挙され、立候補を受諾し、当選する。かれの政治的見解と政治家としての活動。前任者である前議員クラインベーター氏とその典型的悪妻及びその家庭についてのエピソードが述べられる。

マルティンの弁護士及びメーン・ヴィクハルトからのヴォールヴェント事件のその後の事情とヴォールヴェントの消息についての報告。

第13章。マルティンの政治家としての活動。福祉、文化、教育分野への関心と貢献。

ゼッティとネッティの結婚生活の危機的状況。夫イシドールとユリアンの行状。二人の娘はともに結婚を後悔する。

第14章。ルイス・ヴォールヴェントの来訪。身の上話と、これまでの負債返済の申し出。マルティンとヴォールヴェントの妻の妹、ギリシャ系美女ミルハ (Myrrha Glawicz) との出会い。

第15章。マリーが娘達を訪問した不在の時、マルティンは、ヴォールヴェントに招かれて晩餐をともにする。ミルハとの再会。かれはミルハの美しさに魅惑され、秘かな恋心をいたく。そしていまや「愛はすべてを新しい光のなかに出現させる」という言葉を真実だと実感するに至る。翌日お返しにヴォールヴェント一家を誘って馬車でドライブを楽しむ。

背任、公金横領、収賄事件等の「悪病」の全国的蔓延。

第16章。音信不通の息子達の情報打診のためアマーリエ・ヴァイデリヒ夫人のザランダー家訪問。夫のヤーコブが、イシドールが公金横領、背任の疑いで逮捕されたとの知らせをもたらす。悲惨なゼッティの運命。実家への帰宅について。

第17章。イシドールの犯罪の全容。ユリアンの外国逃亡と逮捕と犯罪の全容が説明される。

第18章。インドルとユリアンは裁判で、12年の懲役刑となる。母親のアマーリエはそれがもとで死亡。哀しい母親の葬列の描写。

マルティンは、父親ヤーコブの債務保証のため7万6千フランを支払い、娘たちの離婚訴訟を依頼する。

第19章。「この様な形で時代の病いがザランダーの家庭にも重い症状で入りこんできた。」⁽³⁾

しかし、時間の経過とともにあのいまわしい事件の風聞は薄らぎ、娘たちの離婚訴訟も短期間で決着し、ザランダー家に再び平安が戻ってきた。ところが、ヴォールヴェントはミルハをアルノルトと結び合わせる企みをたて、またもやマルティンに接近してくる。ある冬の午後、野原でマルティンは偶然一人で外出していたミルハと出会い、あの秘やかな恋情を刺戟される。しかし、海外で修業していまや立派に成人したアルノルトの帰宅によって危機的状況におち入らずに済む。

第20章。ヴォールヴェントは、アルノルトの帰国を知り、あいさつを口実にミルハを伴ってザランダー家に現われる。アルノルトはミルハと親しげに会話を交わす。それを横目で見ながらヴォールヴェントは「投げられた釣針がしっかり獲物にかゝった」⁽⁴⁾と思う。しかしアルノルトは冷静にミルハを観察していた。そして彼女が「智恵おくれ」であることを察知する。

第21章。「ふたたび全員が揃ったザランダー家の新しい生活は、いまや曇りなく、静かに流れていった。」⁽⁵⁾

マルティンはアルノルトに政治活動を促すがアルノルトはそれを拒む。アルノルトは既成のいかなる政治勢力にも組みせず、いまは自主的立場を留保したいという見解を述べる。

アルノルトの友人達を招いてのささやかな家庭パーティが開かれる。明るく卒直で、こだわりのない目で物事を観、政治に対しても無関心でない若い世代を知り、マルティンは「こんな人たちが一緒におればみんな大丈夫だ。われわれの未来について心配はない」⁽⁶⁾と思う。

「マルティン・ザランダーの小舟は、いまや現在と未来とのあいだを、嵐と平和とを予期しながら、しかし常により希望をのせて、静に進んでいった。」⁽⁷⁾そしておよそ30年にわたってザランダー家に不幸をもたらした厄病神のヴォールヴェントがミュンスターブルクから去っていくところでこの物語は終わっている。

(三)

以上見てきた「マルティン・ザランダー」のあらすじから明らかなおりと、ザランダー家と特に深い関わりを持っているのが、マルティンの学校友達ルイス・ヴォールヴェントとヴァイデリヒ家の双子の兄弟インドルとユリアンである。これらの人間たちがケラーのペンによってどのように形象化されているかを確かめ、それらが実に見事な疎外された人間群像であることを検証したい。

ルイス・ヴォールヴェントについては次の様に描かれている。

マルティンの思い出話として学校時代のヴォールヴェントについて次の様に語られる。

「私たちは、教員養成所 (Lehrerseminar) ですでに良い友達同志でした。彼は勉強に苦

るしんでいましたからそれほど苦勞しなかった私を頼りにしていました。ほかの人たちの前ではむしろ私が彼から教えてもらっている様なことになったのですが、どうしてその様なことになったのかまるで解りません。だけど私は楽しかったのです。彼はとってもひょうきんで、人なつこくそして頭の回転が速かったのです。そして2人の人間が親密に話しをしていると、彼はその中に割って入ったものです、先生や教授たちの間にさえ入り込みました。学年末試験になると、彼は先生や教授たちと非常にこだわりなくやっていました。彼は、先生たちが特に彼に質問をするかもしれないことについて聞き出すようなことをしたのではなく、彼に質問して欲しいと思っていることを何くわぬ顔をして先生たちにそれとなく伝達することが出来たのです。そしてそれに関連する事柄を私から特別に準備させたのです。

彼にはわずかな言葉で人間の考えを並べたり、あっちこっちへと動かせたりまた分解したりするような天賦の才能が備わっているかのようでした。しかしながら自分で秩序立った考えを持続させることはできなかったのです。』⁽⁸⁾

この陳述からだけでも、ヴォールヴェントのキャラクターの特異性が見てとれる。彼には、人に悪い感情や印象を与えることなしに利己的欲望を満足させるために人を実に巧みに利用する才能がある。これはベテナー特有の資質であり、近代資本主義社会においてますます顕著になってきた「疎外された労働」から産まれる典型的な疎外された人間固有の人間の条件である。

私達の日常生活でこのようなタイプの類例に事欠くことはないが、このようなベテナーの手にかかるとしてもみなかった不幸がふりかかるのである。

学校を出てからマルティンは田舎で教師をやっていたが農場をやっていた両親が死んで遺産を相続し、マリーと結婚する。そして教師を辞めミュンスターブルクへ出て実業家を目指す。麦藁製品の製造販売の事業を順調に経営していた。この事業の取引関係で、またもヴォールヴェントと関わりを持つことになった。その頃のヴォールヴェントについては次の様に書かれている。

「彼は、二・三の代理業と併せて委託販売業を営んでいて、相変らず人だかりのしているところにはどこにでも顔を出す人なつこくて馴れ馴れしい以前と何も変らぬ奴で、誰もが彼はうまく行って自分のやりたいことをよく知っているという印象を受けた。』⁽⁹⁾ 12月のある晩、このヴォールヴェントが事業に巨額の資本投入が必要になったので融資を受けたいがそのための保証人になってくれとマルティンに頼んだ。

マルティンは、友情による義務感からなんの疑念も持たず二つ返事で連帯保証人であり返済責任者として書類に署名をした。一年もたたないうちにヴォールヴェントは自ずから破産宣告をした。破産審理の開始と同時に保証人のマルティンは莫大な額の負債返済を余儀なくされ、マルティンの全財産とマリーの持参金さえも全て失うことになる。ところが破産した筈のヴォールヴェントは、何故か生活に破綻をきたすこともなく、マルティンがブラジルで悪戦苦闘している7年間の間に再起して、いまではミュンスターブルクで「シャーデンミュラー商会」という金融業も兼ねる商会の店主になっていたのである。

そしてマルティンは、事もあろうにブラジルでの蓄財をブラジルの大西洋岸銀行を経由してそれを「シャーデンミュラー商会」から手形によって振出す手続きをとっていたのである。ところがこの商会は皮肉なことに一日前から閉鎖され、取りつけ騒動が起きていたのである。

こうしてザランダー家の人びとは、ヴォールヴェントによってまたもや不幸を背負いこむことになった。

後になってマルティンの弁護士の話しからヴォールヴェントの消息が判る。それによると彼は、巧妙に隠し財産を作っていて、商会が破産した後この土地から姿を消したが、その隠し財産を活用してハンガリーの養豚商人と懇意となりその男の先妻の娘とされる若い女性と結婚し、すでに二人の子供にも恵まれている、というのであった。

ヴォールヴェントはおよそ20年後、装いも新たにミルハを伴っていまでは押しも押されもせぬ大事業家であり政治家でもあるマルティンの前に再び姿を現わすが、それはマルティンの息子コンラートとミルハを結ばせ、あわよくばマルティンの財産と地位からうまい汁を吸いとうろとの魂胆からであった。その企みが未遂に終る次第はすでにあらすじの中で記されているとおりでである。

(四)

ヴォールヴェントに次いでザランダー家に深い関わりを持つのがヴァイデリヒ家の双子の兄弟インドルとユリアンである。

この二人については次の様に記述されている。

「ヴァイデリヒの息子たちは遅しく成長し、身体もすくすくと伸びていった。精神面での能力の点でも彼らは決してそれが不十分だということで悩むことはなかったが、やり始めた勉学をやり遂げる持久力の点では不十分であった。彼らが上級クラスに進んで、生活と学習とが彼らにとって日毎に厳しく、かつ奥の深いものになっていった時、最初にギブアップしたのはユリアンだった。彼はとび出して、ある公証人の事務室に就職した。インドルは、卒業まで持ちこたえたが、しかし大学への進学試験はもう受けないで、いわゆる聴講生として半年間に二、三の法学の講義に出て、それからまたとりあえずある公証人事務所で働くことになった。

二人は、他の欲望を持っている駆け出しのインテリには備わっていないのが常である、規則正しい美しい筆跡をもっていた。そして二人は同様に飾り文字を美しく描くことに没頭するのが好きであった。彼らは、次ぎつぎに起ってくる仕事において非常に役立つことを身をもって示し、また日々の経験を通してほとんど楽々とこの公証人事務所制度の基本をなす知識を身につけていた。」⁽¹⁰⁾

真面目に努力することが苦手である点はヴォールヴェントと共通する性質である。

この二人は公証人として破産者の所有物を処分したり、遺産を売却したり、土地名義の変更などの職務を遂行する中で次第に仕事のうま味を覚えてゆく。思いがけない幸運にもめぐまれて、二人はとんとん拍子に出世する。そしてザランダー家の姉妹と結婚する。仕事のうま味を追求する兄弟は、それなりに勤勉であったが、二人の妻たちはやがてこの結婚を後悔するようになる。そして「あの人たちは全くだめなのです。彼らは心というものを持っていないんです。」⁽¹¹⁾そしてインドルについては次のように述べられている。「こずるい野心家は、今や職と家と、そして妻とを持っていた。彼の人格はそれでもう終りになっていた。そしてただ多数の同類の仲間の雑音の中でのみ存在を主張することができたのである。ひとつ

ひとつの言葉をはっきり聞きとれる家庭の静けさの中ではもう彼には何も残されていなかった。」⁽¹¹⁾

イシドールの家にはブナの林があり、それに続いてうっ蒼たる森があった。その森が近く伐採されて材木商に売られることになっていて、その際イシドールはブナ林を売って儲けることをもくろんでいた。マルティンは、それは環境破壊だと反対する。ブナ林は家庭をほこりやりから守る防護壁だと主張する。それに対してイシドールはこう答える。「そんなことは私にとってはどうだっていいことです。そうなれば引っ越して、一切合財を売り払うまでです。何時までも同じ所にじっとしているのは退屈ですからね。」⁽¹²⁾ マルティンとイシドールの見解の違いの中に疎外された人間の典型的人間像が見てとれる。

イシドールとユリアンにやがて破局が訪れる。公証人という職権を濫用してのうまい儲け仕事の誘惑に負け、背任、公金横領を重ねていたのであった。この様な犯罪は、資本蓄積を自己目的化する社会にあってはすこしも珍らしいことではない。ここに疎外された労働に由来する疎外態が暴露されている。

(五)

マルティンは、一人の州議会議員の辞任にともなってその後任として議員に選出されたのであるが(第12章)、その辞任した前任者はクラインペーター (Kleinpeter) といった。

このクラインペーターのなんとも痛ましい家庭のエピソードは、今日ではごく当り前のものとし私達の周囲でも見ることのできる疎外態の実例である。それについては次の様に語られている。

「元州議会議員クラインペーターは綿織物のちょっとした工場経営者であり、いくらかの資産で父から譲り受けた事業をあまり前進させるわけではないが後退もさせず、用心深く、またのんびりと継続していた。人づき合いのよい好感を持たれる人であったから、彼は財産の蓄積よりは社会的なそして市民的な交わりの方に重きを置いていた。彼が結婚した虚栄心の強い軽薄な妻は、彼を一層その方向に駆りたてた。というのは、彼女は、彼が受けていた名望を、彼女一人だけのせいにして、夫の威を借りてまるで孔雀みたいにふんぞりかえていたからだ。彼が行なった全ては彼女の徳行であり、彼がひとに気に入られるのは、彼女の個人的長所からであり、彼の身に起こることは彼女の功績であった。(中略)しかし家庭においては、彼女は夫の生活を軽蔑的なやり方で不愉快なものにした。(中略)クラインペーター氏が州議会議員に選ばれ、やがて州総督 (Amtsstatthalter) に選任された時、妻の思い上がりはその頂点に達した。いくつかの肩書きはただ彼女のためにのみ存在するように見えた。(中略)息子達は家でただ母親や同じ性質の多数の仲間の粗野な気質と無作法な習慣とお手本にした。家業を秩序正しく経営するのではなく、彼等は営業をおろそかにし、多少の利益をあげることもなく、悪質な空手形を濫用した。」⁽¹³⁾

息子達の乱脈経理の結果、クラインペーター氏の工場は倒産する。息子たちはそれを防ぐため父親に公金流用をせまる。それを拒む父と子供たちとの取っ組み合いの格闘劇が演じられる。そしてクラインペーター氏は総督の地位も議員の身分も自ずから辞退するのであった。

(六)

G・ケラーの文学は、さまざまな視点から考察され、さまざまな評価がなされている。

ヴォルフガング・カイザー (Wolfgang Kayser) は、近現代の主としてドイツ文学を「グロテスクなもの」というテーマから考察している。⁽¹⁴⁾ その著書の中でケラーの作品について次の様な見解を述べている。

「もっと納得のいく例として、ゴットフリート・ケラーの『ゼルトヴィーラの人々』があげられる。この短篇集の中でも新式のグロテスクなものが描かれたわけではなく、むしろケラーは、ロマン主義が開示してくれた豊かな可能性をグロテスクな人間の姿態をあらわすのに採り入れたのである。しかし、彼はその際顕著にかつ明確なスタイルをもって変形を行なっている。」⁽¹⁵⁾

カイザーはホフマンの描くグロテスクな人物群像を概観して、それらを三つのタイプに分類している。第一のタイプは、うわべ（風采と身動き）がグロテスクな人物たちである。第二のタイプは、エキセントリックな芸術家たちであり、そして第三のタイプは「魔神的な」人物たちである、としている。そして、「三つのタイプのすべてがケラーの『ゼルトヴィーラの人々』にも見出される。」⁽¹⁶⁾ として、「幸運の鍛冶屋」のリトゥムライ、「村のロメオとユリア」の中の黒人のバイオリン引き「三人の律義な榊職人」の中のツュス・ピュンツリなどの人物を挙げている。

カイザー独特の視点から見ると、「ゼルトヴィーラの人びと」の中の幾つかの現実的な社会的因果関係の中から必然的に産み出されている人物達が、「およそもう因果関係では理解できない不可抗力が筋を決定している。その不可抗力というのは、愛の情熱、音楽の解放させる力、不正行為の行なわれた農地に妖気をただよわせる不正。魔術なのである。」⁽¹⁷⁾ という解釈となっている。そして更に、「ケラーは、グロテスクなものを表現するにあたって魔神的なものを人間化したり、抽象を具体化したりする。彼はグロテスクなものの独特の表現法を発展させているのである。彼の文学はリアリズムと呼ばれてもかまわないが、無気味で不可解な暗い力が彼の世界のリアリティに属しているということ、またどんなに深く彼の明るい眼差しが洞察し、どれほど朗らかに微笑ませることを好むとしても、彼が深淵の恐怖に無縁でないということを見誤ってはならない。」⁽¹⁸⁾ と述べ、とどのつまりは次の様に結論づけている。

「ケラーの場合、ごくありふれた平凡な人間が犠牲になった。もちろんこの場合も（根本的には不十分な）道徳的解釈をほめかすように、運命がいわば『挑発』されたわけである。すなわち、それは『榊職人』では過大に、しかもおかしな違いに行なわれる『わずかな正義』、『ロメオとユリア』では、父親たちの罪、そして『幸運の鍛冶屋』ではジョン・カビスの幸運をあさることであった。いまここで、われわれはみんな、たえずどんな挑発もないのに陰険な力にさらされて生きているということが暴露する。まさにこのわれわれの日常世界、われわれが毎日かかわりをもつさいな、うわべだけでは親密な者たちが、なじみのない邪魔なものであり、敵意あるデーモンにとりつかれているということが判明する。」⁽¹⁹⁾

カイザーのこの様な見解も、たしかにさまざまな見解のひとつとしての意義は否定できな

いが、ケラーを例えばE・T・A・ホフマンと同列に置くことにより、ドイツロマン派の一人と観る主張はあまりにも主観的、恣意的といわざるを得ない。

ケラーのリアリズムの文学は、決して因果関係で理解できない非合理の力、不可抗力とか魔術あるいはデーモンに支配される世界ではない。

「ゼルトヴィラの人びと」の各短篇に登場する人間群像は、それがどんなに奇怪に見えようと、また異様な行動をしようと、現実社会に存在しない形象はひとつもない。利己的欲望の権現である三人の働らき蟻の櫛職人達も、真面目に働らくことを放棄し、「たなぼた」を願望し、「たなぼた」のためには驚異的な努力を惜しまぬジョン・カビスも、一文無しのに外見だけは貴公子然とすることに腐心した結果幸運を手にする仕立屋シュトラピンスキーも、悲しい結末を迎える恋人たちフレンヒエンとザーリーの愚かしい父親たちも、どのひとつとしてわれわれの周りに見出せぬものはない。しかも彼等は決して幻想的で神秘的なデーモンや魔術に操つられているわけではない。すべては、労働を自己実現のためではなく、もっぱら生活維持を自己目的とすることを余儀なくする社会、拝金主義と弱肉強食の競争原理を美德とする社会の体制、この本来の人間性を疎外する現実社会の中から必然的に産み出される奇形である。

フォイエルバッハの哲学とスイスの民主主義を基盤としているケラーの文学の世界は、カイザーの様な視点からではその真実は見えてこないであろう。

われわれの日常生活の中で出合う奇妙で異様な人間や、通常の判断力では理解を絶するような異常な出来事は、その因果関係が見えない場合、それはデーモンや魔術的力、あるいは不可抗力のなせることとなってしまうであろう。

現実社会の中からそのような異様な人間たちや異常な出来事をマテリアルとして取りあげ、それらを真実を見通す世界観にもとづき、すぐれた感性により芸術的形象に高めた文学は、私達にそれらの真実を明らかに示すものである。それがすぐれたリアリズム文学の特性である。ゴットフリート・ケラーの文学は、すぐれてこのような文学であるといえる。

テキスト及び主な参考書

1. テキストには、Gottfried Keller; Sämtliche Werke in acht Bänden. Bd. 5, Aufbau-Verlag, Berlin, 1961 を用いた。
2. 「ケラー作品集」全5巻、松籟社、京都 1992、の内第4巻 佐野利勝、麦倉達生訳「マルティン・ザランダー」を参照した。
3. Emil Ermatinger; Gottfried Kellers Leben, Artemis-Verlag, Zürich, 1950.
4. Hans Wysling; Gottfried Keller, Artemis-Verlag, Zürich and München, 1990.
5. Walter Baumann; Keller Leben・Werk・Zeit, Artemis-Verlag, Zürich and München, 1980.
6. ヴォルフガング・カイザー、竹内豊治訳;「グロテスクなもの」、法政大学出版局、東京、1972.
7. ハイน์リッヒ・ポーピッツ、小野八十吉訳;「疎外された人間」、未来社、1979.
8. 杉山康彦;「芸術と疎外」、紀伊国屋新書 A-12, 1954.

註

- (1) マルクス, 「1884年の経済学哲学手稿」; 「マルクス=エンゲルス全集」第40巻 517ページ.
- (2) Sämtliche Werke in acht Bänden, Bd. 5, Aufbau-Verlag, Berlin, 1961, S. 55.
- (3) 同上, S. 305.
- (4) 同上, S. 320.
- (5) 同上, S. 322.
- (6) 同上, S. 326.
- (7) 同上, S. 327.
- (8) 同上, S. 175ff.
- (9) 同上, S. 19-20.
- (10) 同上, S. 96.
- (11) 同上, S. 202.
- (12) 同上, S. 204.
- (13) 同上, S. 180ff.
- (14) ヴォルフガング・カイザー, 竹内豊治訳, 「グロテスクなもの」, 法政大学出版局, 東京, 1972.
- (15) 同上, P. 142.
- (16) 同上, P. 143-144.
- (17) 同上, P. 145.
- (18) 同上, P. 147.
- (19) 同上, P. 149.